

秋保氏歴代当主と主なできごと
(中世から藩政時代初頭頃まで)

5代 基盛
永仁3年(1295年)、鎌倉将軍(北条氏)より名取郡を賜り、現在の長袋町から見て名取川対岸楯山に居を構える

7代 盛定
奥州探題吉良貞家より秋保5ヶ村の領有を認められる。姓を「秋保」に改める。

15代 盛房
明応9年(1500年)、名取大曲の長井晴信の奇襲を受け楯山城を奪われ、最上氏(天童)を頼って逃亡する。
12年後、秋保村民の支援を得て楯山城奪回に成功する。弟盛義に馬場を分地し、馬場上館を築館させ、馬場秋保氏の居館とする。

16代 則盛
天文11年(1542年)、伊達氏の天文の乱に加勢、事実上伊達氏に從属し伊達氏との主従関係がはじまる。

17代 勝盛
弟の盛久に境野・新川を分地し、境野館を築館させ、境野秋保氏(境野氏)の居館とする。

18代 直盛
政宗の命により、葛西大崎一揆討伐へ一族を率いて参陣、平定に資する。
天正18年(1590年)秀吉による奥州仕置が行われ、東北地方の戦国時代が終焉する。
天正19年(1591年)、秋保氏は正式に伊達家臣団(御一家)に格付けされる。
慶長8年(1603年)、仙台開府に伴い、刈田郡小村崎村(現蔵王町)へ処替となり、秋保郷は仙台藩直轄となる。
同じくして分家の馬場秋保氏も刈田郡円田村(現蔵王町)へ、境野氏も加美郡大村(現色麻町)へ処替えとなり、それぞれの居館は廃館となる。

19代 定盛
寛永3年(1626年)正月、政宗に脇指「宝刀瀬登丸」を献上するとともに、秋保家系図を上覧し、御一家の家格だったことを言上、右席を賜る。併せて秋保への復帰を請願する。
承応元年(1652年)伊達忠宗から館山原の御屋敷場を賜り、刈田郡小村崎村から9軒の家中を率いてふるさと秋保へ帰郷する。

●秋保氏は、鎌倉時代の後期から幕末まで、秋保郷(現在の仙台市太白区秋保地区及び青葉区新川地区)をほぼ一貫して治めてきた一族で、出自は平家の落人だったとの伝承がある。
秋保郷は、仙台平野と山形盆地を結ぶ交通の要路である二口街道沿いに位置し、秋保の領主として最初に記される基盛は、秋保郷を見渡せる楯山の山頂に城を築き、領有の拠点とした。
国内が北朝と南朝に分かれて争った南北朝時代には、奥羽における北朝方の中心人物である初代奥州管領吉良貞家から、秋保五ヶ村の所領を認められ、姓を「秋保」と改め、戦乱の世を生き抜き秋保郷の支配を確立していった。
戦国時代には、西の最上氏・北部の国分氏といった周辺の有力武将と巧みに関係を構築しつつ、馬場秋保氏や境野氏などを分家し、二口街道沿いの守りを固めた。

秋保氏の発祥・伊達氏への従属

●秋保氏は、山間険阻の辺境故に武いや石高は微力ながらも、二口街道という最上へ通ずる主要路線の戦略・防御に長けており、これを重要視した伊達氏は、戦国時代終結までは一貫して、秋保郷領有を任せている。
特に、家督を継いだ政宗が米沢本拠の時に、日々周辺有力武将との戦に明け暮れ、生き残りをかけた勢力拡大を図る中で、最上氏・大崎氏・葛西氏が手を組む情勢の脅威に耐えていた時期でもあり、背後を守る秋保氏的重要性がさらに増していたと思われる。
その最前線の馬場において、二口峠を越えてくる最上氏侵攻を阻み、著しい功績を残したが、馬場に分家した馬場秋保撰津守定重である。定重は武勇の誉れ高く、今も最上氏との交戦の伝承が残っている。

●秋保氏は、山間険阻の辺境故に武いや石高は微力ながらも、二口街道という最上へ通ずる主要路線の戦略・防御に長けており、これを重要視した伊達氏は、戦国時代終結までは一貫して、秋保郷領有を任せている。
特に、家督を継いだ政宗が米沢本拠の時に、日々周辺有力武将との戦に明け暮れ、生き残りをかけた勢力拡大を図る中で、最上氏・大崎氏・葛西氏が手を組む情勢の脅威に耐えていた時期でもあり、背後を守る秋保氏的重要性がさらに増していたと思われる。
その最前線の馬場において、二口峠を越えてくる最上氏侵攻を阻み、著しい功績を残したが、馬場に分家した馬場秋保撰津守定重である。定重は武勇の誉れ高く、今も最上氏との交戦の伝承が残っている。

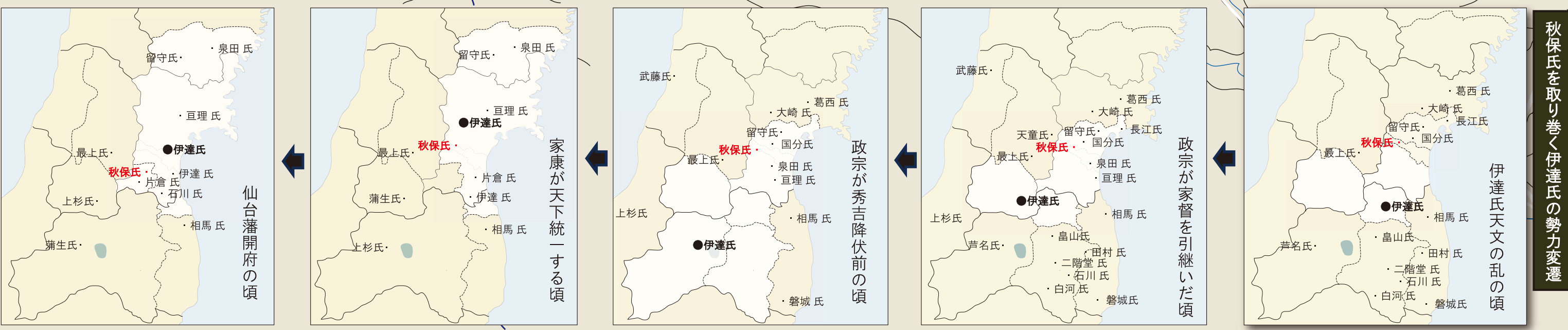
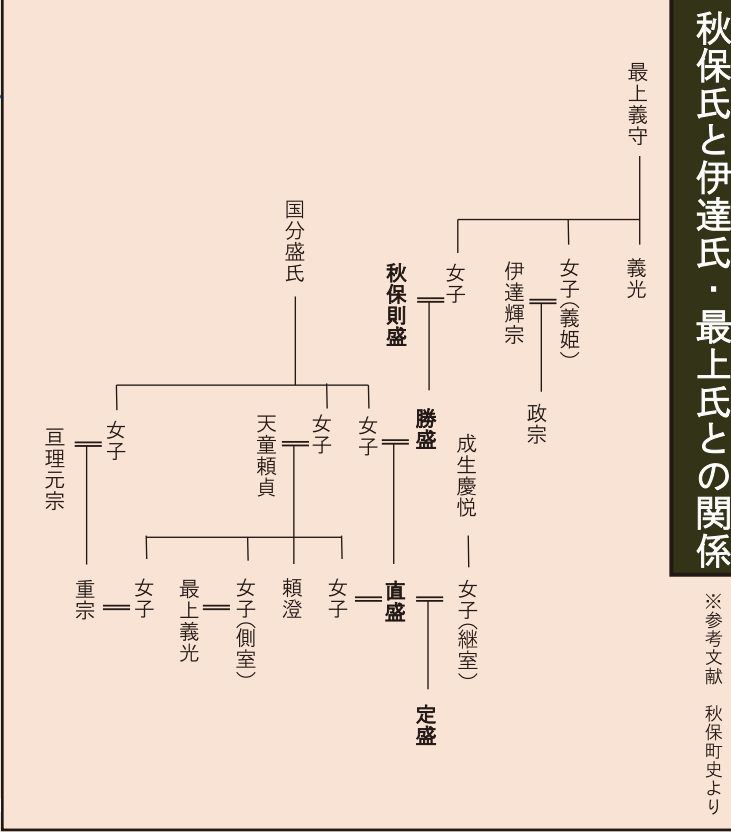
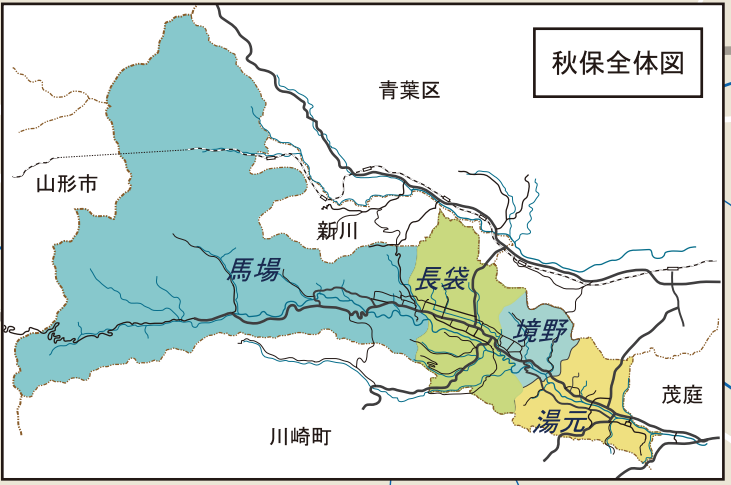
戦国時代末期の秋保氏の城館配置(伊達仙台藩開府直前の頃)



秋保氏本家 基盛→俊衛→盛定→重盛→盛家→広次→広経→康弘→正光→義光
盛房→則盛→勝盛→直盛→定盛……

馬場秋保氏 盛義(本家勝盛の弟)→直重→定重→頼重→信重……

境野氏 盛久(本家勝盛の弟)→盛元→盛忠→盛勝→辰久……



●秋保氏を取り巻く伊達氏の勢力変遷

●秋保氏は、山間険阻の辺境故に武いや石高は微力ながらも、二口街道という最上へ通ずる主要路線の戦略・防御に長けており、これを重要視した伊達氏は、戦国時代終結までは一貫して、秋保郷領有を任せている。
特に、家督を継いだ政宗が米沢本拠の時に、日々周辺有力武将との戦に明け暮れ、生き残りをかけた勢力拡大を図る中で、最上氏・大崎氏・葛西氏が手を組む情勢の脅威に耐えていた時期でもあり、背後を守る秋保氏的重要性がさらに増していたと思われる。
その最前線の馬場において、二口峠を越えてくる最上氏侵攻を阻み、著しい功績を残したが、馬場に分家した馬場秋保撰津守定重である。定重は武勇の誉れ高く、今も最上氏との交戦の伝承が残っている。

秋保郷内の城は、二口街道と峠道の交わる場所に、河川や山などの自然地形を利用して築かれており、秋保氏が街道の確保を重視していたことがわかる。
天文年間1532年から1555年に入り、伊達氏の勢力が名取郡にもおよんでくるに至り、これに従属する道を選り、伊達勢力の地方師団として伊達氏に従い、秋保郷の守備とともに各地へも出陣することとなった。
そのような中、伊達氏と最上氏の関係が悪化すると、最上氏と姻戚関係にあった秋保氏ではあったが自ずと疎遠にならざるを得ず、領土侵犯を企て国境を越えてくる最上勢との小競り合いが度々起こり、撃退したことが知られている。
この頃、伊達氏は大崎氏とも激しく争っており、最上氏が二口街道を越えてしまうと、秋保氏も激しくなるため、背後を守る秋保氏的重要性が増していったと言える。やがて名実ともに伊達家臣団へと取り込まれていき、18代直盛は伊達政宗の下、奥羽の各地に出陣している。